戦後75年 終わらぬ夏 15

最終回

30年越し連れ帰った「父」

京都産業大名誉教授

所功さん78

戦死した父の遺品である飯盒のふたを胸に抱き、全国戦没者追悼式に初めて参列しました。1972年のことです。

「戦後27年、今なお胸の痛むのを覚える」。戦没者を祭った標柱に語りかけるような、昭和天皇のお言葉の実直な響きが、耳に残っています。

父は43年7月に戦死しました。30歳でした。私は当時1歳7か月。戦場から遺骨も遺品も戻らず、父の記憶がないまま育ちます。

中学1年生の夏、初めて母から赤茶けた戦死公報を見せられました。

＜ソロモン諸島ニュージョージア島ムンダノ戦闘ニ於テ、腹部砲弾破片創ヲ受ケ、戦死セラレ候＞と書いてあった。

＜熱い南海の地で日夜元気に御奉公致し居る＞＜どうか立派に功を育ててくれ＞。戦場から届いた父の最後の手紙も読みました。

「お父ちゃんは大砲の弾も恐れず勇敢に戦ったんよ」。私を叱り、励ます時の母の言葉の意味が、やっとわかった。いつかニュージョージア島に立ちたいと思いました。

結婚3年目の71年、父の享年と同じ30歳になった。妻子を残して逝った父の無念を痛切に感じました。翌年7月、島に飛び、現地の協力も得て独自に捜索し、まず遺品の飯盒、続いて父の遺骨を発見したのです。

翌月、その死から30年目に帰還した父の形見を手に追悼式に臨んだ遺児の話を、当時の読売新聞は＜奇跡のめぐりあい＞と報じました。

＜5面に続く＞

社説

戦後75年

75回目の終戦の日を迎えた。政府主催の全国戦没者追悼式が東京の日本武道館で行われる。

新型コロナウイルスの感染防止のため、初めての縮小開催となる。

参列者は500人余りで、例年の10分の1を下回る。会場が密集状態にならぬ配慮に加え、遺族の参列を見送る府県もある。高齢者が多い以上、やむを得まい。

昭和の戦争で命を落とした310万人に対し、心より冥福を祈る意義はいささかも変わらない。その尊い犠牲を礎に、今日の日本がある。戦後75年の平和と繁栄を守り抜かねばならない。

国際協調に対する挑戦がどれほど悲惨な結果を招くか。戦争の記憶を継承し、世界へ訴え続けることは日本人の責務である。

領土の歴史も正確に

京都産業大名誉教授の所功さんは中学生になって初めて母親から父の戦死公報を見せられた。最後の手紙には「どうか立派に功を育ててくれ」とあったという。

72年、父の享年と同じ30歳の時にソロモン諸島で遺品や遺骨を発見した。戦没者の無念さを受け止めることは、戦後日本の針路を堅持する決意を新たにさせよう。

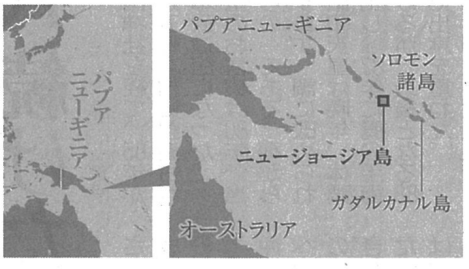
遺憾なのは、日本の外交努力にもかかわらず、一部の近隣国との間で、昭和の戦争に遡る懸案が解決に至っていないことだ。

ロシアは憲法改正で「領土の割譲禁止」を明記した。旧ソ連が北方4島を不法占拠した事実を正当化するもので、北方領土交渉への悪影響が懸念される。

＜ 2020. 8.15 ＞

ソロモン諸島

米豪を分断する要衝として、日本軍が1942年、英領ガダルカナル島などに飛行場を建設。6月のミッドウェー海戦を制した米軍の反転攻勢により、ニュージョージア島を含む島々の拠点は43年には制圧された。50年まで米軍が駐留、76年に自治政府樹立、78年に英国から独立した。



75年前の新聞

1945年8月15日(水) 友引

帝國政府四國共同宣言を受諾
萬世の爲に太平開かむ
畏し敵の殘虐民族滅亡を御軫念
神州不滅總力建設御垂示
戰爭終局へ聖斷
詔書
聽會前御の後最

＊終戦当日の朝刊は、正午の玉音放送の後に配達された